

## 第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ホーフスタッターはこう書いている。

反知性主義は、思想に対して無条件の敵意をいなく人びとによって創作されたものではない。まったく逆である。教育ある者にとつて、もっとも有効な敵は中途半端な教育を受けた者であるのと同様に、指折りの反知性主義者は通常、思想に深くかかわっている人びとであり、それもしばしば、<sup>a</sup>チンプな思想や認知されない思想にとり憑かれて<sup>ア</sup>いる。反知性主義に陥る危険のない知識人はほとんどいない。一方、ひたむきな知的情熱に欠ける反知性人もほとんどいない。

(リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳、強調は引用者)

この指摘は私たちが日本における反知性主義について考察する場合でも、つねに念頭に置いておかなければならないものである。反知性主義を駆動しているのは、単なる<sup>b</sup>タイダや無知ではなく、ほとんどの場合「ひたむきな知的情熱」だからである。

この言葉はロラン・バルトが「無知」について述べた卓見を思い出させる。バルトによれば、無知とは知識の欠如ではなく、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態を言う。実感として、よくわかる。「自分はそれについてにはよく知らない」と涼しく認める人は「自説に固執する」ということがない。他人の言うことをとりあえず黙って聴く。聴いて「得心がいったか」「腑に落ちたか」「気持ち片づいたか」どうかを自分の内側をみつめて判断する。そのような身体反応を以て<sup>ア</sup>あたり理非の判断に代えることができる人を私は「知性的な人」だとみなすことにしている。その人においては知性が活発に機能しているように私には思われる。そのような人たちは単に新たな知識や情報を加算しているのではなく、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替えているからである。知性とはそういう知の自己刷新のことを言うのだろうと私は思っている。個人的な定義

だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい。

「反知性主義」という言葉からはその逆のものを想像すればよい。反知性主義者たちはしばしば恐ろしいほどに物知りである。一つのトピックについて、手持ちの合切袋がっさいぶくろから、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらでも取り出すことができる。けれども、それをいくら聴かされても、私たちの気持ちはあまり晴れることがないし、解放感を覚えることもない。というのは、この人はあらゆることについて正解をすでに知っているからである。正解をすでに知っている以上、彼らはこの理非の判断を私に委ねる気がない。「あなたが同意しようとしまいと、私の語ることの真理性はいささかも揺るがない」というのが反知性主義者の基本的なマナーである。「あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます」というようなことは残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。彼らは「理非の判断はすでに済んでいる。あなたに代わって私がもう判断を済ませた。だから、あなたが何を考えようと、それによつて私の主張することの真理性には何の影響も及ぼさない」と私たちに告げる。そして、そのような言葉は確実に「呪い」として機能し始める。というのは、そういうことを耳元でうるさく言われているうちに、こちらの生きる力がしだいに衰弱してくるからである。「あなたが何を考えようと、何をどう判断しよう」と、それは理非の判定に関与しない」ということは、「あなたには生きていく理由がない」と言われているに等しいからである。

私は私をそのような気分させる人間のことを「反知性的」と見なすことにしている。その人自身は自分のことを「知性的」であると思つているかも知れない。たぶん、思つているだろう。知識も豊かだし、自信たっぷり語るし、反論されても少しも動じない。でも、やはり私は彼を「知性的」とは呼ばない。それは彼が知性を属人的な資質や能力だと思つているからである。だが、私はそれとは違う考え方をする。

知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだと思つている。知性は「集合的叡智えいち」として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない。

わかりにくい話になるので、すこしいねいに説明したい。

私は、知性というのは個人に属するものというより、集団的な現象だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重

要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。

ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思いついたり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きなくなったり、凝った料理が作りなくなったり、家の掃除がしなくなったり、たまっていたアイロンかけをしなくなったりしたら、それは知性が活性化したことの具体的な徴候である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったことがしなくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力を、知性と呼びたいと私は思う。

知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかどうかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によつては考量できない。そうではなくて、その人がいることによつて、その人の発言やふるまいによつて、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的に、その人は「知性的」な人物だったと判定される。

個人的な知的能力はずいぶん高いようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるといふようなことは現実にはしばしば起こる。きわめてヒンパンに起こっている。その人が活発にご本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。これまでのところ、この基準を適用して人物鑑定を過つたことはない。

(内田樹「反知性主義者たちの肖像」)

〔注〕 オリチャード・ホーフスタッター——Richard Hofstadter (一九一六～一九七〇)。アメリカの歴史学者・思想家。

○ロラン・バルト——Roland Barthes (一九一五～一九八〇)。フランスの哲学者・批評家。

設問

(一) 「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」(傍線部ア)とはどういう人のことか、説明せよ。

(二) 「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 『あなたには生きていく理由がない』と言われていくに等しい」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四) 「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」(傍線部エ)とはどういう力のことか、説明せよ。

(五) 「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(六) 傍線 a、b、c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a チンプ      b タイダ      c ヒンパン

## 第二 問

次の文章は、鎌倉時代成立とされる物語『あきぎり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。なお、本文中の「宰相」は姫君の「御乳母」と同一人物であり、「少将」はその娘で、姫君の侍女である。

(尼上八)まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君のこのみ思ふを、なからむあとも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ。今は宰相よりほかは、誰をか頼み給はむ。我なくなるとも、父君生きてましまさば、さりととも心安かるべきに、誰に見譲るともなくて、消えなむのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給はず、御涙もどどめがたし。

まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしはものも申さず。ややためらひて、「いかでかおろかなるべき。おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世にながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当てて、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさまなるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもののおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げにただ今は限りと思して、念仏高声に申し給ひて、眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。

姫君は、ただ同じさまにと、こがれ給へども、かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもあるべきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事もしかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御ありさまを嘆きぬたり。大殿もやうやうに申し慰め給へども、生きたる人とも見え給はず。

その夜、やがて阿弥陀の峰といふ所にをさめ奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。悲しとも、世の常なり。大殿は、こまごまものなどのたまへること、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそとおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて申し慰め奉れ。御忌み離れなば、やがて迎へ奉るべし。心ほそからでおはしませ」など、頼もしげにのたまひおき、帰り給ひぬ。

中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひやり、心苦しくて、鳥辺野ちべのの草とも、さこそ思し嘆くらめと、あはれなり。夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきにやと思すぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもとまで、

鳥辺野カの夜半よはの煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ  
とあれども、御覧キじだに入れねば、かひなくてうち置きたり。

〔注〕 ○御出で立ち——葬送の準備。

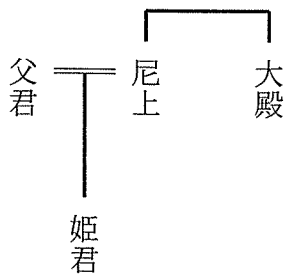
○しかるべき御こと——前世からの因縁。

○阿弥陀の峰——現在の京都市東山区にある阿弥陀ヶ峰。古くは、広くこの一帯を鳥辺野と呼び、葬送の地であった。

○御忌み離れなば——喪が明けたら。

○中将——姫君のもとにひそかに通っている男性。

〔人物関係図〕



設問

- (一) 傍線部工・オ・キを現代語訳せよ。
- (二) 「なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ」(傍線部イ)を、主語を補って現代語訳せよ。
- (四) 「ただ同じさまにと」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (五) 「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ」(傍線部カ)の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。

第三問

次の詩は、北宋の蘇軾（一〇三七〜一一〇二）が朝廷を誹謗した罪で黄州（湖北省）に流されていた時期に作ったものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也

江城地瘴蕃草木、只有名花苦幽独

嫣然一笑竹籬間、桃李漫山綵粗俗

也知造物有深意、故遣佳人在空谷

自然富貴出天姿、不待金盤薦華屋

朱唇得酒暈生臉、翠袖卷紗紅映肉

林深霧暗曉光遲、日暖風輕春睡足



雨中有<sup>レ</sup>涙亦<sup>タ</sup>悽慘  
月下無<sup>ク</sup>人更<sup>ニ</sup>清淑

先生食飽<sup>キテ</sup>無<sup>シ</sup>一事<sup>ニ</sup>  
散步逍遙<sup>セウ</sup>自捫<sup>ハツ</sup>腹<sup>ヲ</sup>

不<sup>レ</sup>問<sup>ハ</sup>人家<sup>ト</sup>与<sup>ト</sup>僧舍<sup>ニ</sup>  
拄<sup>ツキ</sup>杖<sup>ヲ</sup>敲<sup>タタキ</sup>門<sup>ヲ</sup>看<sup>ル</sup>修竹<sup>ヲ</sup>

忽<sup>チ</sup>逢<sup>ヒ</sup>絶<sup>ニ</sup>艶<sup>エン</sup>照<sup>ラスニ</sup>衰<sup>ニ</sup>朽<sup>ヲ</sup>  
嘆息無言<sup>ニ</sup>揩<sup>ぬく</sup>病<sup>目</sup>

陋<sup>ろろう</sup>邦<sup>ニ</sup>何<sup>いづレノ</sup>処<sup>ニ</sup>得<sup>タル</sup>此<sup>ノ</sup>花<sup>ヲ</sup>  
無<sup>む</sup>乃<sup>ろ</sup>好<sup>かう</sup>事<sup>ズ</sup>移<sup>セルカ</sup>西<sup>シ</sup>蜀<sup>ヨリ</sup>

寸根千里不<sup>レ</sup>易<sup>カラ</sup>致<sup>シ</sup>  
銜<sup>ふくミテ</sup>子<sup>ヲ</sup>飛<sup>セルハ</sup>来<sup>メシ</sup>定<sup>こう</sup>鴻<sup>こくナラン</sup>鵠

天涯流落俱<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>念<sup>おもフ</sup>  
為<sup>ためニ</sup>飲<sup>ミ</sup>一<sup>そん</sup>樽<sup>ヲ</sup>歌<sup>フ</sup>此<sup>ノ</sup>曲<sup>ヲ</sup>

明朝酒醒<sup>さめて</sup>還<sup>また</sup>独<sup>リ</sup>来<sup>ラバ</sup>  
雪落<sup>チテ</sup>紛紛<sup>フフ</sup>那<sup>ソ</sup>忍<sup>ビシ</sup>触<sup>ルルニ</sup>

〔注〕

- 定惠院——黄州にあつた寺。
- 土人——土地の人。
- 嫣然——にっこりするさま。
- 西蜀——現在の四川省。海棠の原産地とされていた。
- 紛紛——乱れ落ちるさま。
- 海棠——バラ科の木。春に濃淡のある紅色の花を咲かせる。
- 江城——黄州が長江に面した町であることを言う。
- 華屋——きらびやかな宮殿。
- 鴻鵠——大きな渡り鳥。
- 瘴——湿気が多いこと。

設問

- (一) 傍線部 a・c・f を現代語訳せよ。
- (二) 「朱唇得<sub>レ</sub>酒暈生<sub>レ</sub>臉」(傍線部 b) とあるが、何をどのように表現したものが、説明せよ。
- (三) 「陋邦何処得<sub>二</sub>此花<sub>一</sub>」(傍線部 d) について、作者はどのような考えに至ったか、説明せよ。
- (四) 「為<sub>二</sub>飲<sub>一</sub>樽歌<sub>二</sub>此曲<sub>一</sub>」(傍線部 e) とあるが、なぜそうするのか、説明せよ。

## 第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

その日、変哲もない住宅街を歩いている途中で、私は青の異変を感じた。空気が冷たくなり、影をつくらぬ自然の調光がほどこされて、あたりが暗く沈んでゆく。大通りに出た途端、鉄砲水のような雨が降り出し、ほぼ同時に稲光をともなつた爆裂音が落ちてきた。電流そのものではなく、来た、という感覚が身体の奥の極に流れ込んで、私は十数分の非日常を、まぎれもない日常として生きた。雨が上がり、空は白く膨らんでまた縮み、青はその縮れてできた端の余白から滲み出たのちに、やがて一面、鮮やかな回復に向かった。

青空の青に不穩のにおいが混じるこの夏の季節を、私は以前よりも楽しみに待つようになった。平らかな空がいかにかりそめの状態であるのか、不意打ちのように示してくれる午後の天候の崩れに、ある種の救いを求めていると言っているのかもしれない。

強烈な夏の陽射しと対になって頭上に迫ってくる空が、とつぜん黒々とした雲に覆われ、暗幕を下ろしたみたいに世の中が一変するさまに触れると、そのあとさらになにかが起きるのではないかとの期待感がつり、嵐の前ではなく後でなら穏やかになると信じていた心に、それがちよつとした破れ目をつくる。

このささやかな破れ目につながる日々の感覚は、あらかじめ得られるものではない。自分のアンテナを通じて入って来た瞬間にそれが現実の出来事として生起する、つまり予感とほとんど時差のないひとつの体験であつて、なにかが起こつてから、あれはよい意味での虫の知らせだつたとするのはどこか不自然なのだ。予報は、ときに、こちらの行動を縛り、息苦しくする。晴れわたつた青空のもと街を歩いていて、すれちがいざま、これから降るらしいよといった会話を耳に挟んだりすると、何かひどく損をした気さえする。

空の青が湿り気を帯び、薄墨を掃いたように黒い雲をひろげる。ひんやりした風があしもとに流れて舞いあがり、頬をなでる。来る、と感じた瞬間に最初の雨粒が落ち、稲光とともに雷鳴が響いたとき、日常の感覚の水位があがる。ずぶ濡れになつたらどうしよう、雨宿りをして約束に遅れたらどうしようなどとはなぜか思わない。それを一瞬の、ありがたい仕合わせと見なし、空の青みの再生に至る契機を、一種の恩寵として受けとめるのだ。

しばらくのあいだ青を失っていた空の回復を、私は待つ。崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする。

青は不思議な色である。海の青は、手を沈めて水をすくったとたん青でなくなる。あの色は幻だといってもいい。しかし海は極端に色を変えたとき、幻を重い現実に変える力を持つ。海の青を怖れるのは、それを愛するのと同程度に厳しいことなのだ。

空の青も、じつは幻である。天上の青はいったん空気中の分子につかまったあと放出された青い光の散乱にすぎないから、他の色を捨てたのではなく、それらといっしょになれなかった孤独な色でもある。その色に、私たちは背伸びをしても手を届かせることができない。

いつも遠い。当たり前のように遠い。それが空である。飛行機で空を飛んだら、それは近すぎてもう空の属性を失っている。遠く眺めて、はじめてその乱反射の幻が生きる。空の青こそが、いちばん平凡でいちばん穏やかな表情を見せながら、弾かればつづける青の粒の運動を静止したひろがりとして示すという意味において、日常に似ているのではないか。

単調な日々を単調なまま過ごすには、ときに暴発的なエネルギーが必要になる。しかしその暴発は、あくまで自分の心のなかで静かに処分するものだから、表にあらわれでることはない。心の動きは外から見るかぎりどこまでも平坦である。内壁が劣化し、全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる。そういう裏面のある日常とこの季節の乱脈な天候との相性は、案外いいのだ。

青空の急激な変化を待ち望むのは、見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和するためでもある。そのようにして中和された青は、もうこれまでの青ではない。ぽおっと青を見上げている自分もまた、さっきまでの自分では

ない。この小さな変貌の断続的な繰り返しは体験の質を高め、破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せるのだ。

天気崩れと内側の暴発を経たのちにあらわれた新しい空。雨に降られたあと、たちまち乾いた亜熱帯の大通りを渡るために、私は目の前の歩道橋の階段をのぼりはじめた。事件は、そこで起きた。いちばん上から、人の頭ほどの赤い生きものが、ふわりふわりと降りてきたのである。

風船だった。糸が切れ、飛翔ひしょうの力を失った赤い風船。一段一段弾むようにそれは近づき、すれちがったあともおなじリズムで降りて行く。私は足を止め、振り向いて赤の軌跡を眼めで追った。貴重な青は、天を目指さない風船の赤に吸収され、空はこちらの視線といっしょに地上へと引き戻される。青の明滅エに日常の破れ目を待つという自負と願望があつさり消し去られたことに奇妙な喜びを感じつつ、私は茫然ぼうぜんとしていた。再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた。

(堀江敏幸「青空の中和のあとで」)

設問

- (一) 「何かひどく損をした気さえする」(傍線部ア)とあるが、なぜそういう気がするのか、説明せよ。
- (二) 「青は不思議な色である」(傍線部イ)とあるが、青のどこところが不思議なのか、説明せよ。
- (三) 「そういう裏面のある日常」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「青の明滅に日常の破れ目を待つ」という自負と願望があっさり消し去られた」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。